～和の風～ 町長随想

増澤 善和

源氏物語千年紀に寄せて
紫式部の通った道（三）

さて、現代より結婚の早かったこの時代に、大恋愛物語を書いた式部が、この年頃まで恋愛感情の経験がなかったとは考えられない。武生に下るため、都を離れてすぐに琵琶湖の船旅となったが、ここで詠んだ歌二首が式部集にある。

・三尾の海に
　網引く民の　てまもなく
　立居につけて　都恋しも

・磯がくれ
　おなじ心に鶴ぞ鳴く
　汝が想ひ出づる人や誰ぞも

このように、都を離れた直後に「都に残したあの人が恋しい」と詠んだ相手は誰か。宣孝ではない。私は具平親王（以下親王）だと推理する。親王は、村上天皇の第七皇子で、冷泉天皇・円融天皇の弟君である。親王は豊かな文化人で、漢詩など漢籍では式部の父為時と、和歌では伯父為頼と親交があった人なので、式部はかなり若い時から親王の影響を受け、物語についての指導も受けたようだ。式部は九歳年上の親王に対して、最初は淡い思慕を抱くようになり、やがて強い恋心となったであろう。この恋は式部の片思いだったか、相思相愛だったかは全く不明。

父為時は地方国司級の中流貴族だったので、天皇家直系の親王との結婚は、第二、第三夫人としても許されなかった。関係を持つとすれば妾か召人だが、それは式部のプライドが許さないし、親王もそれを望む人柄でもなかった。従って、式部は親王との愛を断ち切るためにも武生へ…と思ったが、先程の歌にあるように忘れ切れない。それならば、身分・官職・財産・教養など客観的には式部にふさわしく、気楽に言い合える宣孝と結婚してしまえば…。

その間の、宣孝との歌のやりとりを式部集から拾ってみる。

近江の守の女懸想ずと聞く人の、「二心なし」など、常に言ひ渡りければ、うるさくて

・湖の友呼ぶ千鳥
　ことなくば　八十の湊に
　声絶えなせそ

（近江守の娘に言い寄っているウワサのある人（宣孝）から、「あなただけです」と手紙が何回も来て、うるさいので）「湖辺の娘に声をかける千鳥さん、いっそのこと湖全部の港に声をかけられたら」

「紅の　涙ぞいとど
　うとまるる　移る心の
　色に見ゆれば」
　もとより人の娘を得たる人なり

「恋の血の涙も、あなたの浮気心と同じように色あせていました」もともと沢山妻のある人だからしかたないか

「よもの海に　塩焼く海人の
　心から　やくとはかかる
　なげきをや積む」

「方々の海で塩を焼く人が投木を積むように、あなたも浮気の嘆きを積んだらいかが」

手きびしい歌だが、二人の仲は気安さで接近していく。

婚期をおくらせて父を心配させてはの想い、親王への愛を断つため宣孝と結婚しようとする想い、といった多くの想いを胸にしながら、菅谷峠道～タコの呼坂～大谷と通ったのは、長徳四年（九九八）の春、式部二十六歳の時だった。

次の年の一月、式部は宣孝（四十七歳）と結婚。翌長保二年（一〇〇〇）長女賢子誕生。この時代は結婚しても同居するのは正妻だけで、第二夫人以下には通い夫であった。二人の間にはケンカの贈答歌や、宣孝の夜離れを嘆く歌が多くなった。

「この秋（飽き）の月を、あなたはどなたと見ているの」の歌など。しかし、この宣孝も翌年に疫病で急死。式部は二十九歳で娘賢子を抱えた未亡人となり、新しい苦労が始まる。しかし、この年に父為時が武生から帰京し、式部親娘の物心共に支えとなった。

式部の夫宣孝を偲ぶ歌一首。

「見し人の　けぶりとなりし
　夕べより
　名ぞむつましき　塩釜の浦」

「連れ添った人が火葬の煙となってしまった日から、塩釜で塩を焼く絵の煙にも思い出し、親しさが感じられる」

式部はみちのくの塩釜は知らないはず。おそらく越前往復時に見た、大谷浦から五幡浦での塩焼の煙を思い出して詠んだものであろう。

娘賢子が病気のときの歌。

「若竹の　生いゆく末を
　祈るかな　この世を憂しと
　厭ふものから」

「竹の子のように可愛い娘の無事成長を心から祈りたい。そう思う自分は、人生など辛いばかりで嫌気がさしているというのに」

この頃から、憂き世から逃れるように、空想の世界「源氏物語」の執筆を開始する。

そして、宣孝死後三年目の寛弘二年（一〇〇五）、最高権力者藤原道長（式部の心を動かす三番目の男性）に懇望されて、一条天皇の中宮彰子のもとに出仕することになる。

道長との贈答歌の内容。

道長（あの物語を書く貴女だから、口説く男も多いのでは）

式部（そんなことないです。誰がそんな評判を。心外です）

道長（貴女の部屋戸を一晩中叩いたのに。泣き明かしたよ）

式部（開けたらきっと後悔されることになったでしょう）

（以下次号へ）